

歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、従来からの全学的な取り組みとしての「学生による授業評価」、「授業公開・授業参観による教員相互の評価」、および共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会、研修会、学部 6 年生対象の教育に対する卒業時アンケート調査とともに、今年度からの新たな取り組みとして、「歯学教育者のためのワークショップ」、外部教育系セミナーへの教員派遣、外部教育系セミナーの活動協力、および共催活動として「平成 22 年度鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」への参画、アカデミックハラスメントに関する FD 講演会（全学的な事業に移行）をおこなった。本報告では、最後の「FD 講演会」を除く各活動について、以下にその活動概要を記す。

2. 学生による授業評価

歯学部 FD 委員会では、年間の FD 活動の一環として、本学部において以前作成した「学生による授業評価委票」を用いて、予習、復習の実施状況を 5 段階（5：常に十分行った、4：よく行った、3：普通に行った、2：たまに行った、1：まったくしなかった）、また各教員の授業に対する 14 の質問項目に対して 5 段階（5：極めて優れている、4：良い、3：普通、2：やや劣る、1：よくない）で評価を行っている。方法は、平成 22 年度後期に開講した授業を対象に、各授業の終了時に適宜実施した。評価対象者は各授業担当教員であり、職位は教授、准教授、講師、助教であった。無記名式の「学生による授業評価委票」は、学生が記入後、各学年のクラス委員が回収し、学務課歯学教務係へ提出された。これらは OCR により処理後、集計作業が行われた。

集計結果を下記に示す。

記入者の学年	1年生	2年生	3年生	4年生	平均
回答数	1	8	3	8	
この授業の予習・復習を行ったか	2.42	2.17	2.48	2.40	2.37
シラバスに沿った授業がなされたか	4.05	3.95	3.77	3.89	3.91
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.05	3.94	3.80	3.90	3.92
授業の準備がよくなされていたか	4.11	4.30	3.94	3.97	4.08
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.12	4.05	3.94	3.85	3.99
実習器具・材料は適切であったか	4.05	4.03	3.96	3.89	3.98
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.15	4.09	3.95	3.95	4.04
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.91	4.14	3.62	3.88	3.89
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.18	3.82	3.70	3.94	3.91
質問をしやすい雰囲気であったか	3.89	3.72	3.72	3.74	3.76
学生にとって適切な難易度であったか	3.66	3.74	3.88	3.76	3.76
学習意欲が刺激されたか	3.80	3.82	3.89	3.68	3.79
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.93	4.36	4.08	4.05	4.10
教育に対する熱意が感じられたか	4.23	4.26	3.98	4.00	4.12
総合的な評価	3.90	4.13	3.96	3.92	3.98

「学生による授業評価委票」が実施された授業は各学年合計 20 であった。回答された授業の数が少ないため、この数値のみで詳細な分析を行うことは不可能であるが、「授業の予習・復習」に関する項目が、いずれも「3」を下回っている点、また「総合的な評価」が全学年ともに「4」程度である点は、平成 21 年度の結果と同様の傾向であった。また「教員が学問分野の専門家として信頼できたか」、「教育に対する熱意が感じられたか」という 2 項目については、平成 21 年度ともに「4」を超

えており、教員に対する信頼は継続して高いことが推察される。一方で、「質問をしやすい雰囲気であったか」や「学生にとって適切な難易度であったか」については昨年度とともに低い結果であった。これらの点から、より学生に受け入れられる授業を構築するためには、学生からのニーズを的確に把握するとともに、可能なところから実行に移し、授業の改善につなげていくことが重要であると考えられた。

3. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員による授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施しており、平成 22 年度は 11 月 8～19 日の期間に行われた。この期間の歯学部における授業は原則として全て公開とし、教員は FD 活動の一環として、随時授業参観することを可能とした。質問項目は下記の 14 項目とし、5：極めて優れている、4：良い、3：普通、2：やや劣る、1：よくない、の 5 段階での評価を依頼した。結果を下記に示す。

	A	B	C	D	E	F	G	H
シラバスに沿った授業がなされたか	4	4	5	5	4	5	4	5
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4	4	5	4	4	5	4	5
授業の準備がよくなされていたか	5	4	4	4	4	5	4	5
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4	4	5	5	4	5	4	5
実習器具・材料は適切であったか	-	-	5	-	-	5	-	-
実習は授業内容の理解に役立ったか	-	-	5	-	-	5	-	-
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4	5	5	5	4	5	5	5
質問や学生による発表の機会を与えたか	4	3	5	2	2	5	4	5
質問をしやすい雰囲気であったか	4	3	5	2	3	5	4	5
適切な難易度であったか	4	4	4	4	3	5	5	5
学習意欲が刺激されたか	4	4	4	3	4	5	4	5
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	5	5	5	4	5	5	5	5
教育に対する熱意が感じられたか	3	5	5	4	4	5	5	5
上記項目以外の観点も含めた「総合的な評価」	4	4	5	4	5	5	4	5

授業参観に参加した教員数は 8 名であり、昨年度同様（参加者 8 名）参加者が少ない傾向であった。評価結果からは、「教材が適切であったか」、「明瞭で聞き取りやすい話し方であったか」など具体的な授業方法についての評価は比較的高かった一方で、「質問や学生による発表の機会を与えたか」、「質問をしやすい雰囲気であったか」などの評価が低く、学生と教員の双方向性の授業方法については十分実施されていない点が推察された。この取り組みを通じて、教員が同僚の授業を見学することにより様々な意味で刺激を受け、自己の授業方法の在り方を再考するきっかけになればよいと考えられる。そのためには今後、より多くの教員の本取り組みへの参加を促す必要があると考えられた。

4. 学部 6 年生対象の教育に対する卒業時アンケート調査

歯学部 FD 委員会では歯学部教育委員会とともに、学部 6 年生の卒業時に、6 年間受けてきた教育全体の振り返りという意味で、各種教育内容、活動、施設などについて、歯科医師になる立場で有効であったかどうかについて、無記名式アンケート調査を実施している。本年度は、平成 22 年度学位記授与式が挙行された平成 23 年 3 月 25 日に、歯学部 6 年生のうち同式に出席した 42 名を対象に調

査を行った。調査項目は下表の 18 の各種教育内容、活動、施設などについて、5：極めて有効であった、4：どちらかと言えば有効であった、3：どちらとも言えない、2：どちらかと言えば無意味であった、1：全く無意味であった、の 5 段階で評価を行うよう依頼した。以下にその結果を示す。

<回答者に関する事項>

	鹿児島県	鹿児島県以外の九州	左記以外
出身地	12	11	19
卒後研修先	21	5	13

<鹿児島大学入学後の教育内容、活動、施設などについて、歯科医師になる立場であなたにとって有効であったかどうか、ご記入ください>

	5	4	3	2	1	平均
オリエンテーション	6	16	15	3	2	3.50
共通教育	3	12	13	9	4	3.02
導入系科目	10	13	10	6	1	3.63
基礎系科目	13	21	5	3	0	4.05
臨床系科目	17	18	5	1	0	4.24
医系科目	12	17	9	3	1	3.86
臨床実習	22	17	2	0	0	4.49
選択科目	12	13	13	3	0	3.83
CBT	14	20	8	0	0	4.14
OSCE	11	21	7	1	2	3.90
総合歯科医学	3	18	15	3	3	3.36
チューター制度	5	19	7	3	8	3.24
課外活動	17	12	13	0	0	4.10
学術情報基盤センター	5	14	15	5	1	3.43
図書館	20	14	7	0	0	4.32
学習室	15	11	12	3	1	3.86
学生控室	14	12	11	5	0	3.83
学務事務室	13	15	14	0	0	3.98

調査の結果、評価の平均値が「4」を超えた項目は、「基礎系科目」、「臨床系科目」、「臨床実習」、「CBT」、「課外活動」、「図書館」であった。質問が「歯科医師になる立場で」ということであり、また歯科医師国家試験合格発表直後という調査時期から、これらの項目が高く評価されることは理解できる。逆に、相対的に評価が低い傾向であった教育内容は、調査時期や質問方法による影響かもしれないが、学生のニーズに合っていない教育内容であった可能性もあり、今後検討していく必要がある。

5. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、共用試験実施評価機構から問題作成 FD 専門部会委員のタスクフォースを招き、事例ベースによるブラッシュアップの一端を解説する。

2) 日時

平成 23 年 2 月 17 日（木）15：00～18：00

3) 場所

医歯学総合研究科棟 1（歯学系）3 階 第 1 示説室

4) タスクフォース（講師）

小口春久先生

日本歯科大学東京短期大学 学長

共用試験歯学系 CBT 実施小委員会 問題作成 FD 専門部会 部会長

天野 修先生

明海大学歯学部 教授

共用試験歯学系 CBT 実施小委員会 問題作成 FD 専門部会

5) 参加者

歯学部教員：56 名

6) 内容

当初、講演「共用試験歯学系 CBT 作問法とその良問・悪問の例」、討論「CBT ブラッシュアップの問題点」といった 2 部構成を計画していたが、本学部の CBT ブラッシュアップの取り組み状況、および作問担当者の希望等ふまえ、タスクフォースからの提案で 3 時間全体を本学部で作成中の課題を例示しながら具体的に検討し、アドバイスや提案、参加者を交えた討論を行う形式へと変更した。

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。本年度は平成 22 年 12 月より作問を開始し、2 月よりブラッシュアップ作業に移ってきた。今回の講習会は、このような作問活動に連動し、作問者（および教職員）にとってより効果的な講習会となるよう、数点の工夫を行い実施した。一つは、事前に新作問題に対して内部である程度ブラッシュアップ作業を行い、これを講習会当日の題材として使用してもらったこと（修正前後をパワーポイントファイルにまとめてタスクフォースに郵送しておいた）、またもう一点は事前のブラッシュアップ作業を FD 活動の一環とし、作問担当者以外の教職員にも参加して頂いた。そこで事後アンケート調査を行い、これらの意見を集約したものを事前にタスクフォースに提供していた。その結果、講習会の内容はいずれも我々が目にしたものばかりであり、その場で具体的なコメントを頂けたことは大変貴重な機会であった。また、事後アンケートに上げられた疑問点等については、タスクフォースのご配慮で時間内で大半の項目にご回答頂き、極めて有意義な時間であったと考えられる。

<講習会題材の例>

コアカリ 記入例	
Type-A	Before After
9歳の男児。前歯でものが噛みにくいことを主訴に来院した。切歯の交換後に気になったという。習癖と特記すべき全身的な既往はない。削除した箇所。初診時の口腔内写真を示す。 口腔内診査で、上下顎骨の前後的位置関係を判断するのに適切な観察項目はどれか。	9歳の男児。前歯でものが噛みにくいことを主訴に来院した。切歯の交換後に気になったという。習癖と特記すべき全身的な既往はない。 骨格的な不正を疑い、第一大臼歯の前後的位置関係を見ることにした。 初診時の口腔内写真を示す。 不正咬合の分類はどれか。
a. オーバーバイト b. オーバージェット c. 乳犬歯咬合関係 d. リーウェイスペース e. 第一大臼歯咬合関係	a. アングルⅠ級 Ⅱ級 Ⅲ級 b. アングルⅠ級 Ⅱ級 Ⅲ級 c. アングルⅠ級 Ⅱ級 Ⅲ級 d. アングルⅠ級 Ⅱ級 Ⅲ級 e. アングルⅢ級
	
図の修正事項(必要な場合) ・画像から何を判断させたいのかが不明瞭 ・画像がなくても正答を導ける ・問題の修正に合わせて画像を交換する など視覚素材の修正方針を記入。	
備考 ・ブラッシュアップで意見が分かれた問題 ・優先的に指導を受けたい問題 など指導上の参考になる情報を記入。 メモ的な内容は↓枠外の「クリックしてノートを入力」欄に記入。	

<講習会当日の風景>



於保教育委員長挨拶



天野 修先生



小口春久先生



会場風景

7) 事後アンケート結果

(1) 今日のFD講習会を受講して

<理解できた点>

- ・結果を出して方法を問うのは良くない(クイズ形式はだめ) (16)
- ・視覚素材の形式(模式図はグレースケール、カラーを使用してよい基準等)、配置 (13)
- ・作問することによる教員側へのメリット、作問の意義 (12)
- ・A~Q問題の作問方法の違い(タイプ別で出題目的が異なる) (12)
- ・SBOの重要性 (10)
- ・連問の文章はフルスケール(全ての情報を入れ、学生が情報の取捨選択できるかを問う) (10)
- ・良問の作成方法(お作法など) (8)
- ・副文の書き方(「正しい」は安易に使わない、等) (8)
- ・臨床における失敗例の扱い(あくまで対象は臨床実習前の学生である) (6)
- ・選択肢の並べ方、同質、同レベルがよい (6)
- ・基礎-臨床相互に問題を作成することの必要性 (4)
- ・視覚素材の位置づけ、考えさせることの必要性 (4)
- ・良問・悪問の違い (3)
- ・私たちが考える良問と機構の考える良問に違いがある (2)
- ・共用試験の意義 (2)
- ・マニュアルを熟読する必要性 (2)

- ・視覚素材があるかどうか、の基準 (2)
- ・写真では分からない情報を文章に挿入すること (2)
- ・L 問題のタイトルは解答のヒントにならないようにすること (2)
- ・誤答肢が「誤り」であることを説明できる所見が必要である (2)
- ・教育の重要性について
- ・フィロソフィーの大切さ (学生に向けてのメッセージ)
- ・良問が作成できる人は学生に何を教えるべきかが分かっている人
- ・少し難しい問題を作る方が良い
- ・日頃の臨床において専門分野の問題意識をもつ
- ・臨床現場との関わりを考えること
- ・日頃から作問を意識した視覚素材を集める必要性
- ・主文の書き方 (連問では前問の答えを改行して問題文に入れる)
- ・写真はデジタルでキレイなものである必要がある
- ・マニュアル (中央、学内とも) の記載が不十分。講演内容を文字で理解できるように改訂の必要がある
- ・実際作問した問題を直接批評されて、どこが悪いのかが理解できた
- ・L 問題の趣旨 (選択肢を見なくても主文、副文、視覚素材で答えが出るようにする)
- ・学問的にありえないものは採用されない

<理解できなかった点>

- ・連問の作り方、問題間の関連性、流れ (5)
- ・具体的にはどのように変えていけばよいか、という意見があったらより良かった (2)
- ・視覚素材の作成方法 (色の使い方等) がよく理解できなかった (2)
- ・「流れを止める問題」の意味
- ・「流れ」という概念
- ・L 問題の作問の趣旨
- ・誤答肢の質
- ・短絡的な問題は良くないようだが、学内では「難しすぎる」として修正されてきた。基準が分からない
- ・連問の文章はフルスケールで、ということだが、どこまで情報を盛り込めば良いのかが分からない
- ・” シンプル” と” 短絡的” の違いが難しい
- ・採択率が低い問題を作らないようにする方法
- ・採択率が低い問題を作ってしまう現状への考慮

<ご意見等があればご記入ください>

- ・とても参考になりました (3)
- ・今回は BU 終了後の講習会だったが、作問開始前に講習会を行った方がよりよいのではないか (2)
- ・提出した問題が全て取り上げられていて良かった (2)
- ・次年度以降の作問に向けて有意義だった
- ・非常に得るものが多かった、できればまたお願いしたいと思います
- ・より実践的な FD で単なる講義よりもはるかに効果的だと思った、こんな FD は参加していて楽しい

- ・機構側の生の声が聞けて大変良かった
- ・系統的に教えて頂けてよくわかりました
- ・実際に BU した問題をさらに厳しく BU するので、非常に分かりやすかった
- ・先日の BU に参加した上で本日の講習を聞いたので良く理解できた
- ・2 年に 1 度くらいのペースで行ってもらいたい
- ・良問が作れる人がその分野で何が重要かが分かっている人であるという CBT 作問の意義
- ・作問を通じて、基礎と臨床の連携を深めることが重要である、という TF の言葉が印象的だった
- ・BU に相当の時間をかけるべきである
- ・W 問題をどのように作ったか（連携したか等）を調査し、より連携を深めるように誘導してはどうか
- ・Q 問題で 4 回分の画像をそろえるのはかなり困難であると感じた
- ・この過程に初めて参加しました、これまでただ視覚素材を提供していただけなので反省しています
- ・第一示説室のプロジェクターの性能のためか、せつかくの視覚素材がよく見えなかった
- ・今日の内容を現場へフィードバックすることが重要
- ・模範として「良問」を示してほしかった
- ・視覚素材の重要性は理解できるが、少なくなっていく疾病は過去の視覚素材でも良いのではと思います
- ・句読点が気になった、教科書など文科省の公文書は「,」「。」を使うらしいが、CBT では「,」「。」を使っているようだ
- ・学内での試験問題についても適切、不適切があるかも知れないので参考になった
- ・毎回作成する問題が同じような感じになってしまうのですが、形式等も毎回新しいものでなければならぬのか（BU すればするほど類似問題になってしまう）

<今後、FD 講習会で取り上げてもらいたい内容があればご記入ください>

- ・よい講義の方法、よい講義プリントの作り方
- ・授業の組み立て方（15 回、毎回、異なる授業法、評価法）
- ・教育について
- ・他大学における特徴的な教育方法の紹介
- ・講義、マンツーマンの授業法
- ・学習者の評価方法について詳細に解説してほしい
- ・臨床研修の評価
- ・当学部で行う OSCE をいかに良く向上させていくか
- ・基礎と臨床の関連性を問う問題を作る際、そテーマや視覚素材を探すきっかけとなるような会合の場を設定してほしい

6. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する研修会

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、作問における基本的事項の理解を深めるとともに、より質の高い作問を行うために、教育委員会共用試験実施部会における CBT 作問委員会主催のグループ内ブラッシュアップに参加し、作問作業の実際を体験する。

2) 日時および場所

<第1回>

A グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 9 日 (水) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 3 階 第 1 示説室

B グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 7 日 (月) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 会議室

C グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 8 日 (火) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 3 階 第 1 示説室

<第2回>

A グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 21 日 (月) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 会議室

B グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 23 日 (水) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 会議室

C グループ・ブラッシュアップ

平成 23 年 2 月 22 日 (火) 18:00~20:00 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 3 階第 1 示説室

3) 対象者および参加者

<対象者>

歯学部教員全員

<参加者>

第 1 回 A グループ・ブラッシュアップ: 38 名

B グループ・ブラッシュアップ: 41 名

C グループ・ブラッシュアップ: 32 名

第 2 回 A グループ・ブラッシュアップ: 13 名

B グループ・ブラッシュアップ: 16 名

C グループ・ブラッシュアップ: 21 名

4) 内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。歯学部 FD 委員会では、教育委員会共用試験実施部会とともに CBT 問題作成過程を歯学部 FD 活動の一環としてとらえ、歯学部教職員に対して各 CBT 作問グループ (A、B、C グループ) で行われるブラッシュアップに参加してもらい、問題作成上の基本的事項の確認とともに、自らの作問能力向上へ向けて取り組んでもらう機会を設けた。

5) 事後アンケート結果

(1) 今日の FD 研修会を受講して

<理解できた点>

- ・ CBT の良問の作り方 (15)
- ・ CBT の BU の流れ (15)
- ・ 視覚素材の拡大率等のレイアウト、調整方法 (15)
- ・ 正答と誤答の理由の記載方法 (13)
- ・ 選択肢の書き方 (簡潔に短く、同等の意義を持たせる、組み合わせの作り方) (12)

- ・図表の作り方（単位、説明、意味がはっきりとわかるように、矢印の書き方）（12）
- ・画像、写真がいかに大切であるか（12）
- ・CBTにおける問題文などの表現方法（部位の書き方等）（10）
- ・正しい用語の使い方（文字列の形式、言い回し方、スペース、半角、全角等も統一する）（10）
- ・選択肢を並べる順序（10）
- ・CBTは学生に「不平等にならないように」する必要がある（7）
- ・主文の書き方（ストーリーの組み立て方、最後が一文字なのはよくない、など）（6）
- ・シンプルな問題作成が必要（無駄な情報は省く）（6）
- ・作問のねらいの記載方法（専門外の人間が見ても理解できるようにする）（6）
- ・文章のみで正解が出ないようにする（写真を見なくても答えられる問題はだめ）（6）
- ・視覚障害（色弱等）の受験生も考慮する（形態で比較できるようにする、など）（6）
- ・L問題の作り方（作問のねらいの書き方、「×」回答の解説は不要、など）（6）
- ・作問時の細かいルール、レギュレーション（マニュアルの重要性）（4）
- ・コアカリキュラムとの整合性（4）
- ・副文の書き方（4）
- ・文章と画像の関連性（4）
- ・表を見やすくするテクニック（3）
- ・W問題の作り方（3）
- ・最終形まで全員で考えることは、効率的な作問に有効
- ・連問一問目の写真の在り方（初診時の写真が良い）
- ・CBTは内容はもちろん形式も大切である
- ・出題者のミスを見つけるための配慮（誤答の説明の書き方）
- ・機構が求めている要素
- ・他科の知識
- ・本当に必要なことを見失っているなあということ
- ・作問者が時間をかけ練り上げた問題であるということ
- ・BUには一つ一つ時間が必要であるということ
- ・他科の先生の意見を聞くことで見落としや不足している部分を抽出できること

<理解できなかった点>

- ・作問の細かいルール（6）
- ・専門用語の選び方（言葉の使い方、人名の表現方法など）（6）
- ・文章の作り方（文末の表現方法、情報量など）（5）
- ・選択肢の作り方、並べ方はどれが最適なのか（4）
- ・議論が細かすぎて進まないように思える時がある（2）
- ・ナンセンス肢の定義（2）
- ・W問題の1/2と2/2の関連性（2）
- ・CBTの問題レベル（難易度）（2）
- ・良い問題と悪い問題の違い

- ・ SBO とは？具体的には？
- ・ Q 問題の主文はどれくらい省略してよいのか
- ・ L 問題はこういった問題が適切なのか
- ・ 文章と写真の重要度の比重が難しい
- ・ 図、写真を設問の流れに合致するようにすること
- ・ 文字などが入った図の最も望ましいレイアウトの仕方
- ・ 色弱の人にも解けるように、とのことだが臨床との兼ね合いはどうか
- ・ 視覚素材は必ずないといけないのか
- ・ 専門外なので詳しいことが判らなかった
- ・ (PC の) 操作方法
- ・ 全体的な理解が難しい
- ・ 問題の形式を守るがあまり、本当に大事な” 問いたいこと ” を見失っている
- ・ 問題作成の規制が多すぎて作問できる問題に偏りがでる
- ・ 色々な意見ができるのは良いが、大きな変更を促すような意見を出して議論するのはどうか
- ・ CBT の作問は教員側にとってどのようなメリットがあるのか
- ・ CBT の採択率がどのような業績評価につながるのか。労力と成果への還元があまりにも不明
- ・ 最終決定に関して規格化されていない点（大御所が良いと言えればいい、など）

<ご意見等があればご記入ください>

- ・ 全体 BU の前に各講座内での BU があまりなされていない （9）
- ・ 1 問当りの BU にかかる時間が長く効率が悪い （7）
- ・ 基本的なチェックは全体でする前に行うべき（チェック表の活用、など） （7）
- ・ 多くの先生が参加することにより、様々な意見、提案が提示され、より良い BU が出来る （2）
- ・ マイクのスイッチが入っていなかったのか、声が小さく聞き取りにくかった（第一示説室） （2）
- ・ 写真が NG であればその問題の BU に時間をかける意味はないのでは （2）
- ・ 出た意見に対して全員の前で PC 上で修正を行うのは非効率 （2）
- ・ FD 研修として行うなら BU の内容を吟味する必要がある （2）
- ・ 司会が難しい （2）
- ・ このような会議はすごく充実していて良い
- ・ 大変お疲れ様です、頑張ってください
- ・ 各科の教科書を用意すればすぐに調べられて便利
- ・ 問題作成のヒントが得られて良かった
- ・ BU 時に問題点を解決してしまうことは、作問者にとってとても有難い
- ・ 1 時間と決めてもらえると集中できるので良い
- ・ 開始時間は適切で良かった（18：00 開始）
- ・ 精度の高い問題を作るためにはこのような研修会は必要、個人で勉強するより効率的
- ・ 良い問題を作るという意味で BU の意義は理解できる。しかしながら技術的な議論に偏り、問題の GIO、SBO を考えることを忘れていているような気がする
- ・ 一度ワーキングだけの FD 研修会を開催した方が良い

- ・FDとしては、どこを指摘されどのように修正されたかをまとめてほしい
- ・二回目のBUからFDにした方が良くと思う
- ・経験上、セミナー室くらいの小さな部屋に、作問委員のみが集まる方が自由な討議が行いやすい
- ・作問者自身が参加していないと非効率なBUになってしまう
- ・（可能なら）各分野の先生がそれぞれのBUの日に一人はいた方が良い
- ・人数が多すぎて纏まらない感じ
- ・連問のBUの際には、まず全体像を見てからの方が良い
- ・有意義であったが、意見を出す人が限られている
- ・教授の先生方は参加しないのでしょうか？
- ・2時間は長い気がするので、もう少し短くてもいい
- ・作問委員以外の先生は1時間で切り上げた方が良い
- ・やや作問数が多いと思う
- ・講義室が多少狭い（参加する人数に比べ）（9階会議室に42名）
- ・BU中に学生が会場周辺にいた。開催場所等には気をつけた方が良いのではないのでしょうか
- ・もう少し質問しやすい雰囲気にしてほしい
- ・文法や記述のルールで単純な修正は、教員よりも事務的な業務に長けた人の手を借りてもよい
- ・CBT 問題作成の過程は教員の標準化という効果は大きいですが、解く側に解答できるだけの知識を供給できておらず、学生が予備校等のCBT 対策参考書を必死で勉強している姿は違和感を感じる
- ・CBT の作問の様な大学および個人の業績に何ら関係のないことにあまり大きな時間を割く必要はない。もう少し効率的な運用を

<今後、FD研修会で取り上げてもらいたい内容があればご記入ください>

- ・採用されたCBT問題と不採用になった問題等を見くらべて考察したい （3）
- ・臨床実習に活かせる内容（指導法など） （2）
- ・作問の際の主文、副文の表現方法についていつも迷う。その辺の基本的な説明、研修会
- ・選択肢を5つそろえるテクニック
- ・専門外来別での検討会
- ・他大学のCBT作問の流れについての講習
- ・CBT、国家試験の作問に関する講習会
- ・”総合歯科医学”試験の問題もBUが必要
- ・上手な講義の仕方（大学に限らず、専門学校、予備校、高校など）や、学生参加型の講義、実習の成功例の紹介など
- ・学生への効果的な教育方法
- ・学生が居眠りしないスライド作成法
- ・学生、研修医指導の到達目標の設定と評価の具体的方法（教官の最低限の統一的理解が必要）
- ・OSCE、CBTの教育上の意義について
- ・ポートフォリオについて
- ・教授の先生方が参加するようなテーマ
- ・歯科臨床で求められる基礎分野の知識とは何か

7. 歯学教育者のためのワークショップ

1) ワークショップテーマ

歯科医学教育における教育能力開発

2) 到達目標

GIO

効果的な歯科医学教育を行うために、現状の自施設の抱える問題点を認識し、その改善に貢献する

SBO s

- 1) 教育の原理ならびにあり方を説明する
- 2) 自らの教育活動を振り返る
- 3) 効果的な教育方法を立案する
- 4) 立案した教育方法を評価する
- 5) 教育改善に対する抵抗の克服手段を説明する
- 6) 教育改善に積極的に関与する

3) 主催

鹿児島大学歯学部、鹿児島大学歯学部 FD 委員会

4) 参加者

基礎系、臨床系各講座より 1 名、合計 20 名程度（主として教育現場を担当している若手教員が望ましい）

5) 実施日

平成 23 年 1 月 29 日（土）

6) 会場

鹿児島大学 医歯学総合研究科棟 1 9 階 会議室・ゼミ室

7) ワークショップスケジュール

時 間	内 容	備 考
8:40	受付開始：名札、資料の配布、昼食費の受領	
9:00	開講 ディレクター挨拶 タスクフォース、スタッフ紹介 グループ分け、資料確認、役割分担	
9:15	アイスブレイク：自己紹介	
9:30	「ワークショップとは」	
9:45	セッションⅠ：「望ましい学習活動の特徴」 説明（5分） グループ討論（30分） 発表・全体討論（20分）	解説 グループ討論 アイスブレーキング
10:40	セッションⅡ：「指導者の役割」 説明（10分） グループ討論（20分×3） 発表・全体討論（15分）	グループ討論 ワールドカフェ
12:10	昼 食	
13:00	セッションⅢ：「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題」 説明（10分） グループ討論（50分） 発表・全体討論（15分）	グループ討論 問題点抽出 KJ法
14:20	セッションⅣ：「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題」 説明（15分） グループ討論（45分） 発表・全体討論・解説（30分）	グループ討論 問題点分析 KJ法
15:50	休 憩	
16:00	セッションⅤ：「学習者中心の教育」	
16:30	セッションⅥ：総合討論	レクチャー
16:45	閉講式	ポストアンケート
17:00	修了	修了証授与

8) スタッフ

主催者： 杉原 一正 教授 鹿児島大学歯学部長
 ディレクター： 田口 則宏 教授 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
 タスクフォース： 田松 裕一 准教授 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
 鎌下 祐次 講師 鹿児島大学医学部・歯学部附属病院
 諏訪 素子 診療講師 鹿児島大学医学部・歯学部附属病院
 河野 博史 助教 鹿児島大学医学部・歯学部附属病院
 事務局： 鮫島 順子 係長 学務課歯学教務係
 神宮司 浩二 係員 学務課歯学教務係

9) 参加者名簿

所属(旧講座名)	氏名	職位
1解剖	岩井 治樹	助教
2解剖	峰 和治	助教
生理	三浦 裕仁	准教授
生化	楠山 譲二	助教
病理	平野 真人	助教
薬理	増原 正明	講師
理工	有川 裕之	助教
基礎	梶原 和美	准教授
予防	五月女さき子	助教
1保存	梶原 武弘	助教
2保存	武内 博信	助教
1補綴	迫口 賢二	助教
2補綴	加地 彰人	助教
1口外	上川 善昭	助教
2口外	石畑 清秀	助教
小児	武元 嘉彦	助教
矯正	植田 紘貴	助教
麻酔	遠矢 明菜	助教

10) グループ分け

＜一日を通じてのグループ分け＞		＜セッションⅡのグループ分け＞	
Aグループ （ゼミ室1）		テーブル1 （ゼミ室1）	
旧講座名	氏 名	旧講座名	氏 名
1解剖	岩井 治樹	薬理	増原 正明
生化	楠山 譲二	基礎	梶原 和美
基礎	梶原 和美	2口外	石畑 清秀
1補綴	迫口 賢二	小児	武元 嘉彦
2口外	石畑 清秀	矯正	植田 紘貴
小児	武元 嘉彦		
		テーブル2 （ゼミ室2）	
Bグループ （ゼミ室2）		旧講座名	氏 名
旧講座名	氏 名	1解剖	岩井 治樹
2解剖	峰 和治	生理	三浦 裕仁
病理	平野 真人	予防	五月女さき子
薬理	増原 正明	2保存	武内 博信
予防	五月女さき子	1口外	上川 善昭
1保存	梶原 武弘		
2補綴	加地 彰人	テーブル3 （ゼミ室3）	
		旧講座名	氏 名
Cグループ （ゼミ室3）		2解剖	峰 和治
旧講座名	氏 名	理工	有川 裕之
生理	三浦 裕仁	1保存	梶原 武弘
理工	有川 裕之	1補綴	迫口 賢二
2保存	武内 博信		
矯正	植田 紘貴	テーブル4 （ゼミ室4）	
1口外	上川 善昭	旧講座名	氏 名
麻酔	遠矢 明菜	生化	楠山 譲二
		病理	平野 真人
		2補綴	加地 彰人
		麻酔	遠矢 明菜

1 1) タスクフォースの役割分担

セッション	全体担当者	グループ担当者			待機
		A	B	C	
開講式・総合司会	杉原・田口				田松・鎌下・ 諏訪・河野
アイスブレイク（自己紹介）	田口				田松・鎌下・ 諏訪・河野
ワークショップとは	田口				田松・鎌下・ 諏訪・河野
セッションⅠ（望ましい学習）	鎌下	田口	田松	諏訪	河野
セッションⅡ（指導者の役割）	田口	1：河野、2：鎌下、3：田松、4：諏訪			
セッションⅢ（問題点抽出）	河野	諏訪	鎌下	田松	田口
セッションⅣ（問題点分析）	諏訪	田松	河野	鎌下	田口
セッションⅤ（レクチャー）	田口				田松・鎌下・ 諏訪・河野
セッションⅥ（総合討論）	田口				田松・鎌下・ 諏訪・河野
閉講式・修了証授与	田口				田松・鎌下・ 諏訪・河野

12) ワークショップ会場

受 付： 9階会議室前

全体討論会場： 9階会議室

グループ討論会場： Aグループ：ゼミ室1、Bグループ：ゼミ室2、Cグループ：ゼミ室3

スタッフ控室：第3示説室

【医歯学総合研究科棟1（歯系）】									
9階									
グループ討論室									
	ゼミ室 (6)	ゼミ室 (5)	ゼミ室 (4)	ゼミ室 (3) C	ゼミ室 (2) B	ゼミ室 (1) A	9階会議室	第3示説室	
全体討論室 スタッフ控室 受付									
階段	学生談話室		歯学共同実験室				EV	トイレ	階段
							EV		

1 3) 資源

<9階会議室>

机、イス（参加者+TF+スタッフ）、ホワイトボード、スクリーン、液晶プロジェクター、パソコン、マグネット、レーザーポインター(指示棒)、電波時計×1、呼出鈴

<A、B、C グループ討論室(ゼミ室)>

机(×1)とイス(参加者分)、ホワイトボード×1、新聞紙(サインペン汚損防止用)、模造紙(10枚×3)、ポストイットノート×3、文殊カード(30枚×3)、スティックのり×3、マグネット、中太字サインペン(5色セット×3)、電波時計×3、文房具(鉛筆、消しゴム)

<スタッフ控室>

机とイス、文房具、コピー紙など

1 4) 各セッションの概要

セッションⅠ 「望ましい学習活動の特徴」

これまでの生涯で、最も印象に残っている学習体験を絵で表現する。各グループで情報共有し、グループの考える「望ましい学習活動の特徴」をまとめる。

セッションⅡ 「指導者の役割」

「ワールドカフェ」形式を用い、参加者全員が対話(ダイアログ)をする中で、「指導者の役割」というテーマに対して相互理解、協議の中から集約された結論を見出す。

セッションⅢ 「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題」(問題点抽出)

KJ法を用いて、グループ毎に「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題」について発散的に思考し、抽出された問題点をカテゴリー別に分類する。

セッションⅣ 「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題」(問題点分析)

セッションⅢより得られた問題点を、緊急度、優先度、難易度の観点から分析を行い、解決すべき最重要課題を決定する。その後、決めた課題について具体的な解決方法を議論しまとめていく。

1 5) レクチャーの記録 (担当: 増原正明)

セッションⅤ 「学習者中心の教育」

田口則宏教授から「学習者中心の教育」のレクチャーが行われた。

まず「教育目標」については、大学を取り巻く環境の変化とそれに対応していく必要性が増してきたこと、いわゆる「学士力」について考えなければいけないこと、特にディプロマ・ポリシーについて述べられた。

その後、「カリキュラム開発の方向性」として、以下のことがレクチャーされた。

{これまでのカリキュラムにおいては科目ごとの教育目標を積み重ねていき、その結果としての最終目標は「国家試験合格」や「社会の求める歯科医師」といった漠然とした将来像のみであった(=Planning forward)。しかし今後これを「どのような医療者が求められているのか?」という問いかけへの返答として具体的な目標・将来像を設定し、そこへ到るためのものとして各講義・実習の到達目標などを設定していかなければならない(=Planning backward)。}

この説明内容に関しては非常に考えさせられるものがあった。

次にヨーロッパの事例を紹介された後、「学習者中心の教育」というテーマの下、「どれだけ教え

たか」という教育者中心の考え方から、教育相手が「どれだけ学んだか」という学習者中心の考え方にパラダイムを変換すべきだ、と述べられた。

また学習プロセスに大きく関与するカリキュラムについて、公式／非公式のカリキュラム SPICES モデルなど、目新しい事柄に関しても簡単に紹介された。

以上のレクチャー、及び最後に頂いた資料も合わせると、参加者にとって非常に有意義な FD になったと考えられる。

16) グループプロダクト

セッション I

<A グループ> (担当：楠山譲二)

岩井先生：『猫の解剖』 大学時代に初めて解剖を行った。自主的にやってみたいと思ってやらせてもらった。実際に手を動かすのが楽しかった。現在は解剖の教室に勤務。

迫口先生：『ビール』 学問としての学習のみでなく、人間的に成長するための学習もある。酒を飲みながらの先輩・後輩との関わりあいの中で多くの大切なことを学ぶことができたと思う。

武元先生：『学位審査』 4年間の集大成。苦労は多かったが達成感を味わうことができた。

石畑先生：『ICU での研修』 医学部の ICU に研修に行った際、指導医の先生に教わったことが今の自分の学生への指導のやり方に影響を与えている。図に書いて説明をしてくれたり、良い言葉などを引用して指導してくれた。

梶原先生：『無茶苦茶な実験』 大学時代の専門課程での実習で2つの実験をやった。今考えると良くやったなと思うくらい無茶な実験であったが、そのおかげで自分が学生に実習をやらせる際には、もっとしっかりとフォローをしなければいけないと考えながらやっている。

楠山先生：『学生時代に行った研究』 自分がやりたいと思ってやった研究だった。自分がやりたいという気持ちと、それを助けてくれる先生たち・環境があれば学習効果を延ばすことができると感じた。

<B グループ> (担当：加地彰人)

「各個人の印象に残った教育指導を絵に描いて表現する」

・大学院時代の研究でよく怒られていて、たまに褒められることもあったが、やはり苦労した時期の印象が強く残っている。

・初めて解剖学実習に望んで、最初にメスを持ったとき緊張で手が震えた。

・大学の实習で少し理不尽に怒られたが、夜遅くまで指導してもらった事が国家試験につながり、結果的には感謝している。

・学生時代に友人とタバコを吸いながら情報交換していた。そこでは先生に素行を注意されたこともあったが、意外にそこで得た情報は勉強になる話が多かった。

・学生実習で怒られることも多かったが、最後の打ち上げでは先生方と乾杯して交流が出来たことが良き思い出として残っている。

・小さい時に親の指導のもと「ひまわり」を弟と育てていて、自分の身長より大きくなって感動したのが印象に残っている。その時に「育てる」という経験を得た。

以上のことから、印象に残った教育指導は怒られたイメージが強く記憶に残ることが分かる。さらには厳しさとともに成果(達成感)があっても記憶に残り、最終的に指導者と打ち解けることがある

のであれば良い印象となっている。

{まとめ}

教育指導に厳しさ（怒ることも必要）があり、そこに優しさの裏打ちや友人のフォローがあり、結果的に達成感・成果があれば強く印象に残るものになるということである。

<C グループ> （担当：遠矢明菜）

今までに印象に残った体験。

竹内先生 高校の時 100m の予選で一番でテープを切ったこと。

植田先生 卒業式の校長先生の個人に向けての言葉。

上川先生 ベルリンでの留学時の言葉の壁を乗り越えたこと。

有川先生 高校の先生答案を点数を告げながら返却していたこと。

三浦先生 生物の先生が最初の授業の時に DNA の話をしてくれたこと。

遠矢先生 語学留学時の体験。

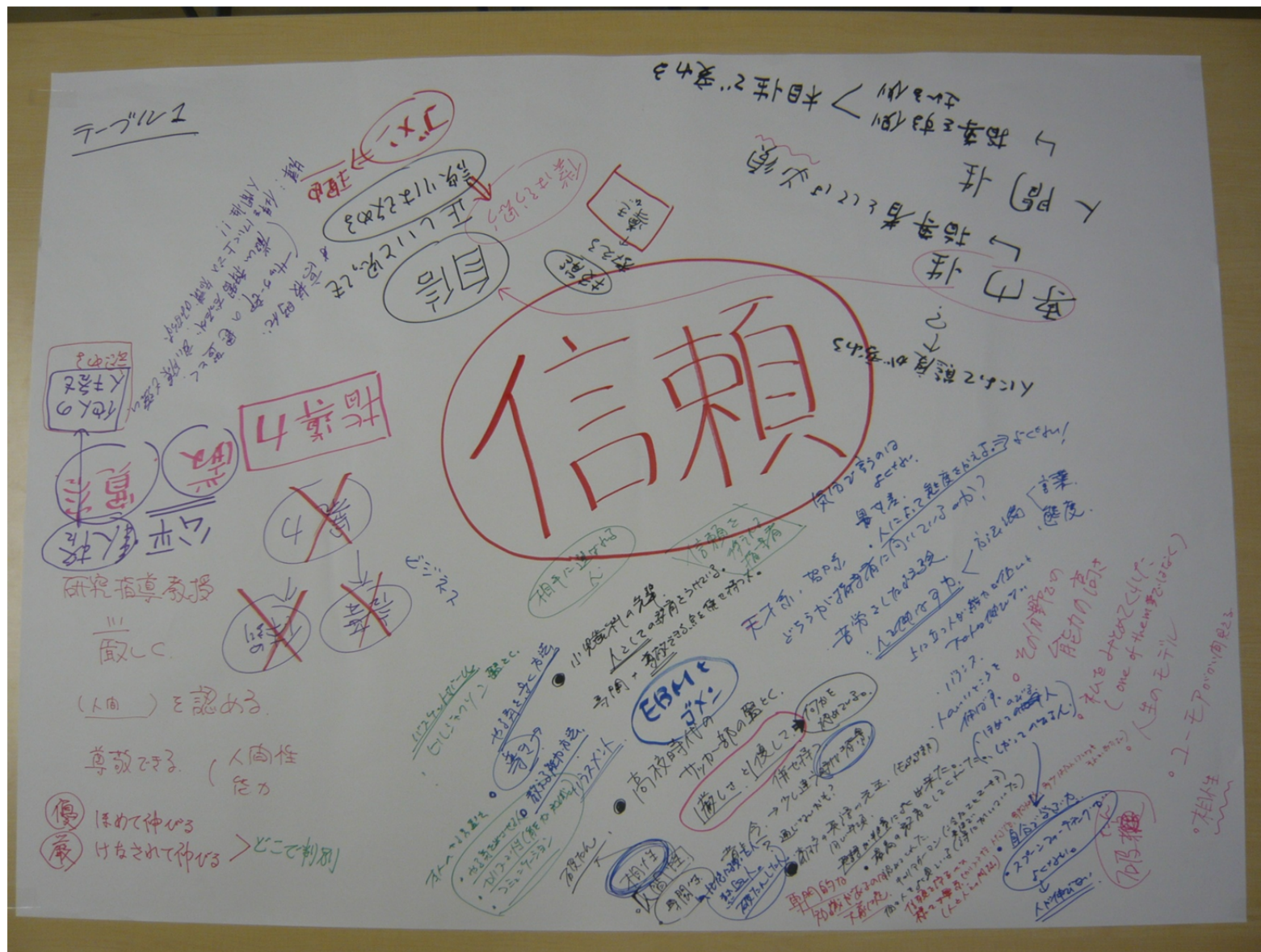
・望ましい教育とは

体験を通したもの。

インパクトの大きいもの。

達成感をもたらすことが望ましい。

＜テーブル 1＞



テーブル

③

中子核の英語の光生

② 人間性のある (厳は、愛は)

知識は頭-要

◎ 人の意見を聞く

指導者とは
どういふ人

政治家は指導者？
スポーツ指導者とは

(程馬步)

表观力

柑子と知子
(学友)
32-7

② 知路 (何所性) 信願

身近 李 福
太学院时代
李 福 授身

(直接関数)

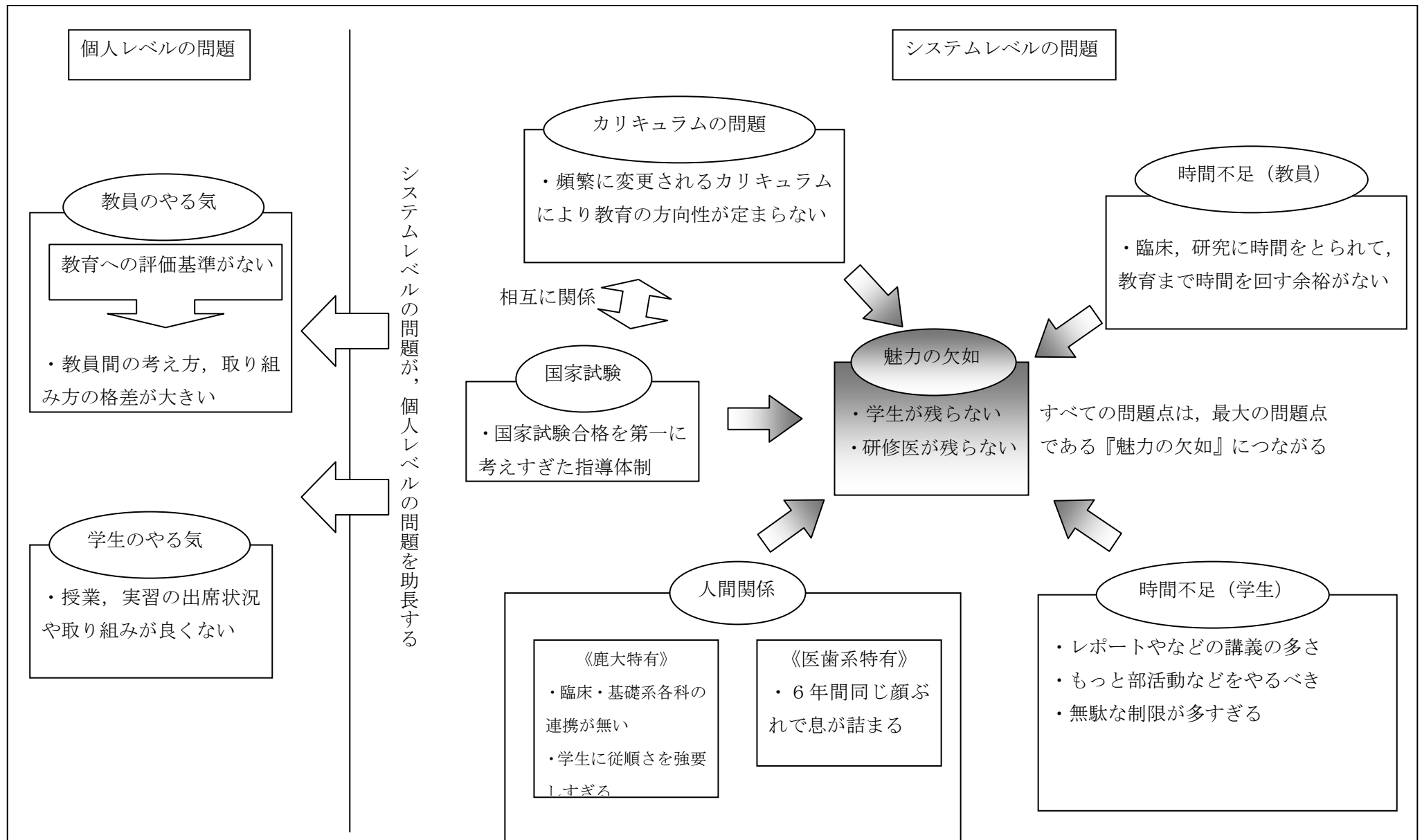
木下 幸子 敬子

長
信者

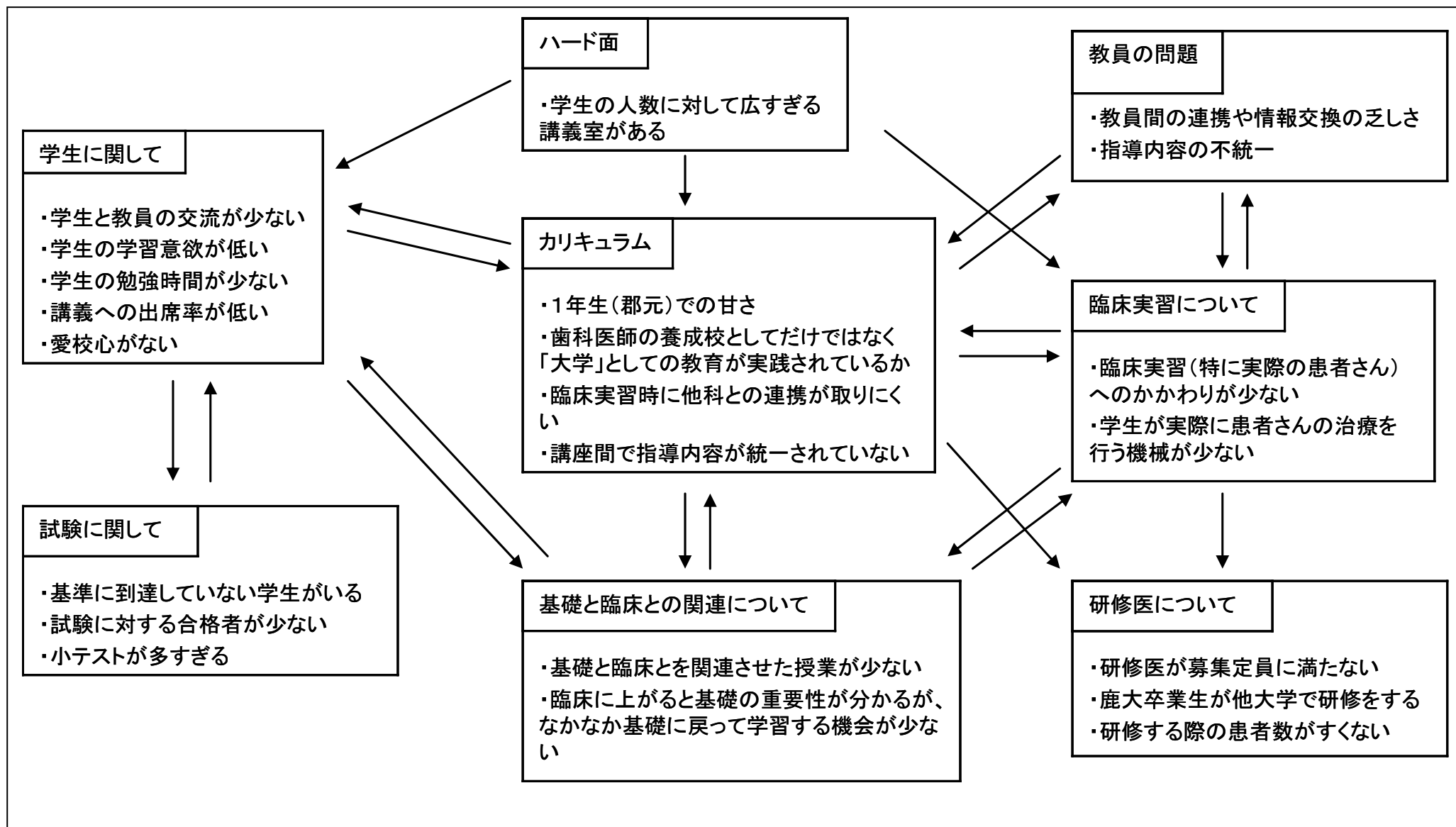
①

向...
果...
...

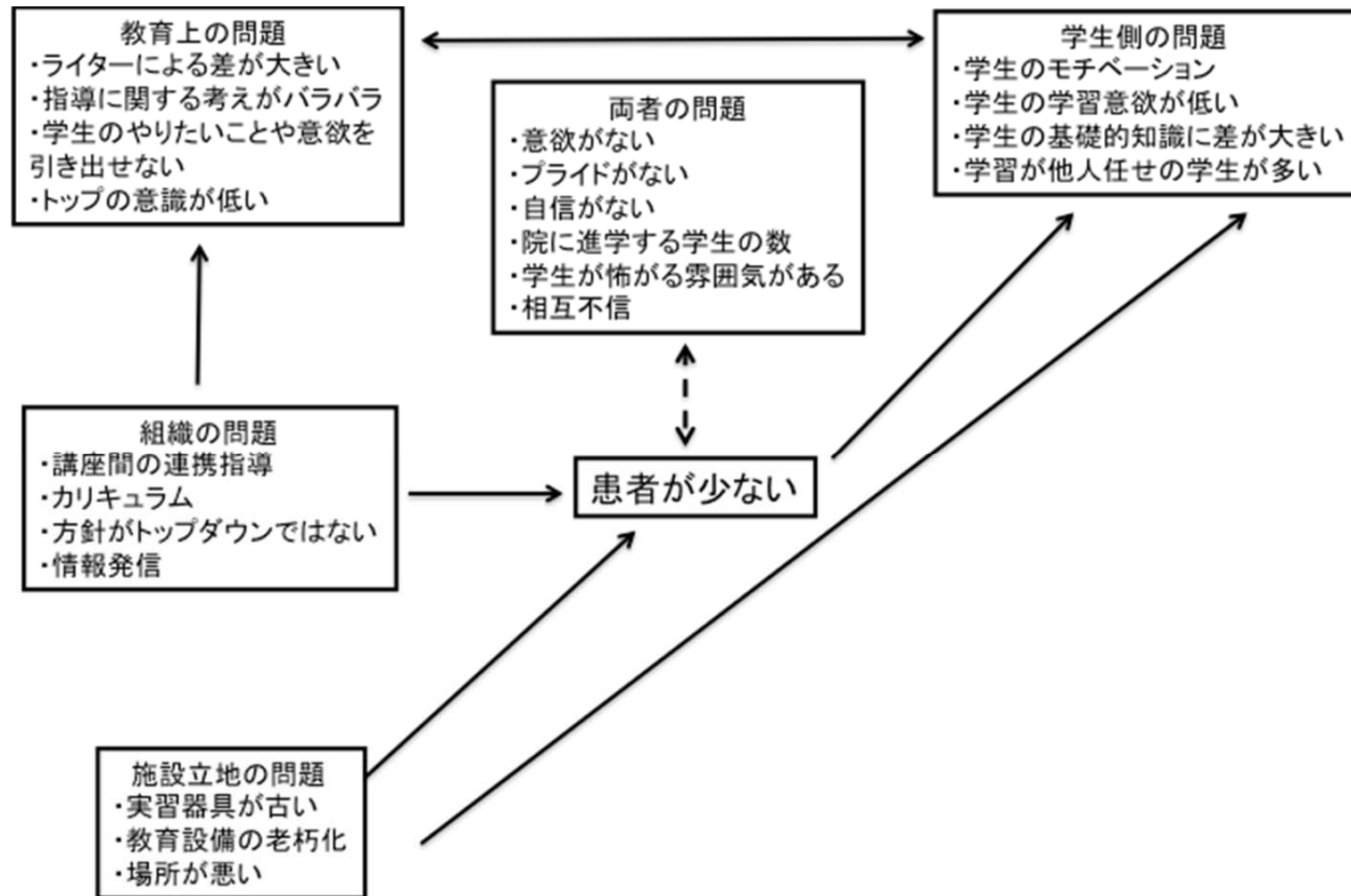
セッションⅢ 「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題点（問題点抽出）」 <A グループ> （担当：石畑清秀）



<B グループ> (担当: 峰 和治)

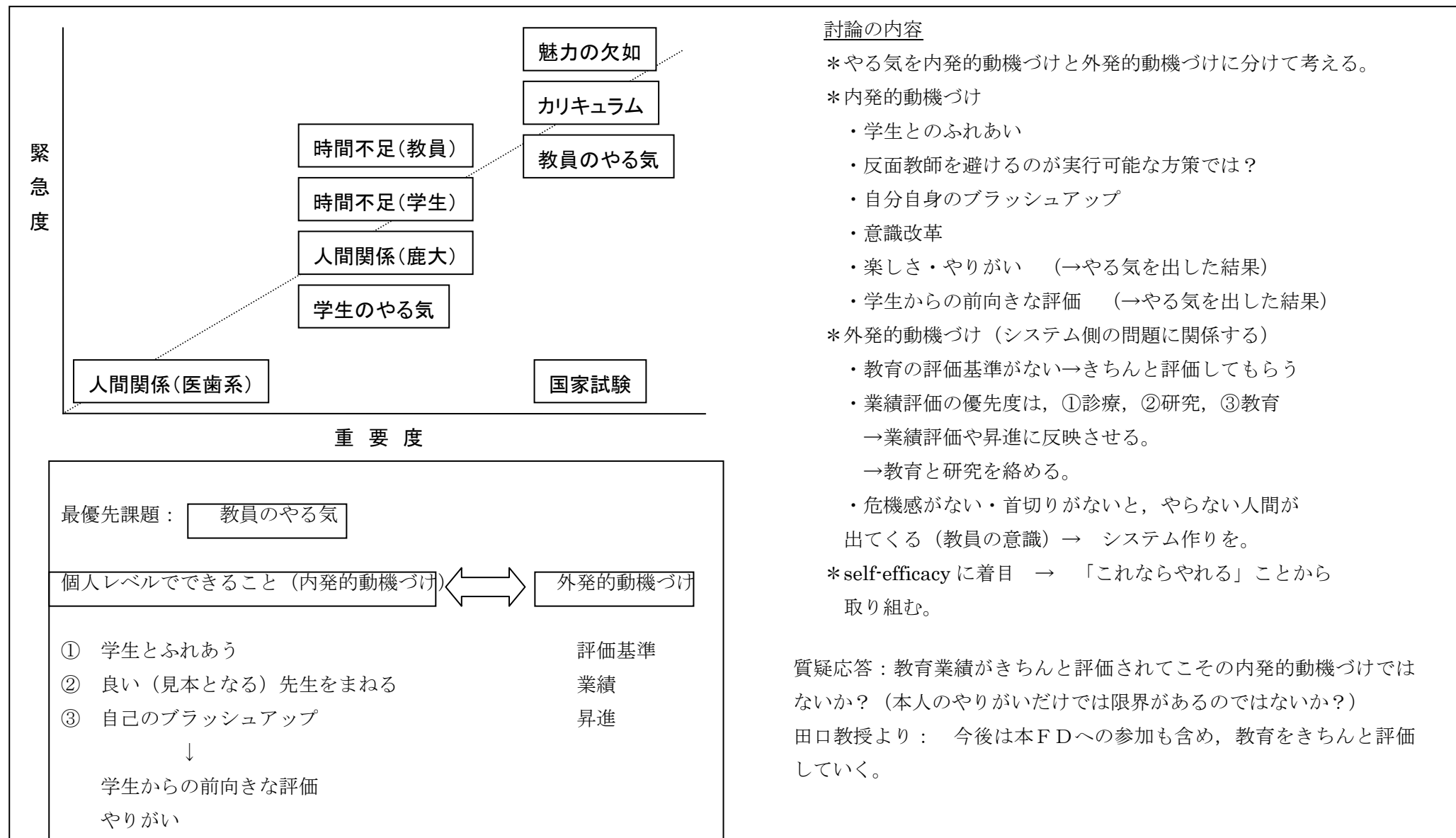


<C グループ> (担当: 植田紘貴)

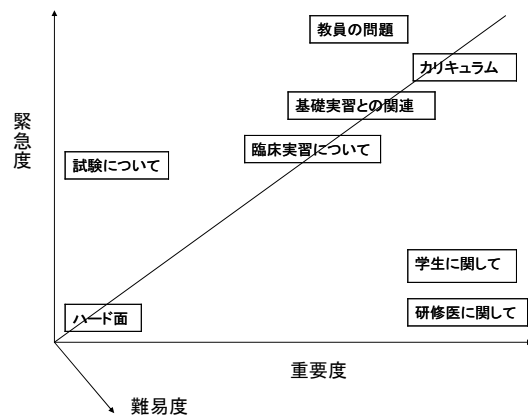


セッションⅣ 「鹿児島大学歯学部を抱える教育上の問題点（問題点分析）」

<A グループ> （担当：梶原和美）



<B グループ> (担当：五月女さき子)



*各テーマを分析し難易度も考えた時に、あえて「臨床実習について」を最優先課題とする。

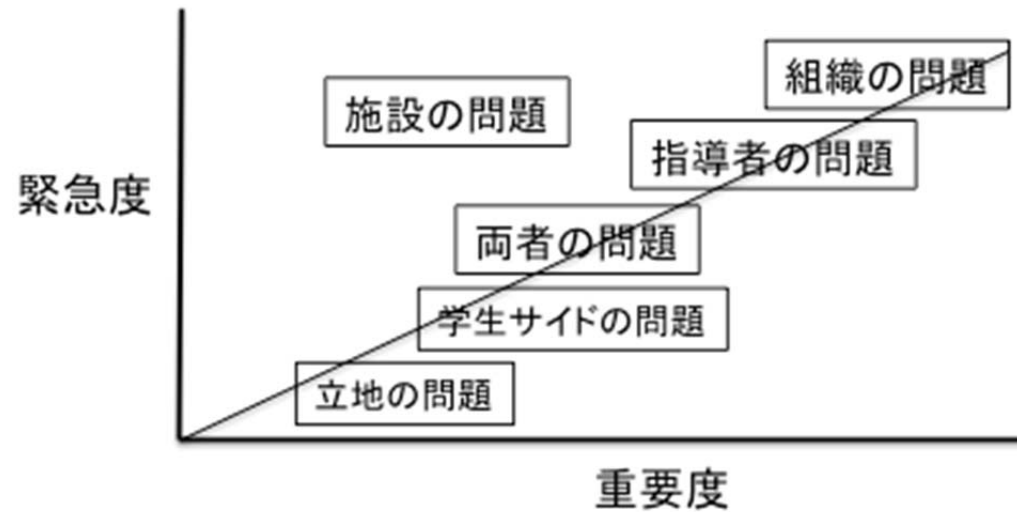
「対応策の協議」

- ・ 他科の教員同士の交流を拡大が必要。同様に教員と学生との交流を拡大する。
- ・ 教育内容に関して臨床と基礎の科間会合を小規模で行う必要がある。
- ・ 学生のゼミへの積極参加を促す（現在は任意参加）。
- ・ 診療科間の連携をもっと行う必要がある。
- ・ 一人の患者さんを担当し、最初から最後まで治療を全て（診療科をまたいで）見学・対応するようにした方が良い。
- ・ 基礎の講義に臨床を想定した内容を入れてもらう。

{対応策のまとめ}

1. 診療科間の連携をもっと取るようにする。
2. 学生には一人の担当患者を実習期間を通して最優先で実習（見学・診療参加）させる。
3. 他科との教員同士の交流拡大と、教員—学生間の交流を拡大していく。
4. 教育に対する評価システムの構築を行う。

<C グループ> (担当：武内博信)



最優先解決課題

組織指導者の問題

対応策

- ① 講座間のコミュニケーションをとる。定例会合の開催
- ② 学部の教育方針を明確にする。評価の標準化やシラバスの明示
- ③ 教員としての意識を高める。FD参加を促す。

17) 概要と感想

セッションⅠ (担当：武元嘉彦)

<概要>

A グループ

◎猫の解剖：実際に手を動かして印象深い。◎学生時代の研究・発表、学位審査：発表までの苦労は多かったが達成感を味わえた。◎心理学の実習：ボールペンを落として拾ってくれた人にインタビュー…方法自体が印象深かった。◎ICUの指導教官：教官の人柄とICUでの経験。◎ビール：先輩や後輩との腹を割った会話による人生勉強

まとめ：苦労は伴っても自主的に取り組んだ学習が印象に残っている。

B グループ

◎最初の解剖：緊張感が印象に残っている。◎ビールの絵：実習で怒られても、その後お酒を飲みながらフォローをしてくれる。◎ひまわりの絵：弟と一緒に育てて、開花したときの嬉しさ。◎教官：実習のときの指導教官が怖かったが全員が国家試験に合格できた。

まとめ：怒られるときはあっても成果が残った学習が印象に残る。

C グループ

◎教科書を使わない講義：他の先生との違いがあって印象的。◎花の絵：校長先生が、一人一人の絵に違ったメッセージを書いてくれた。◎陸上の絵：100mで一番を取ったときの嬉しさ。◎先生に起こられている絵：高校で怒られたときに、叩かれた経験を元に自分は将来そうならないようにしようと思った。◎部活：指導者は厳しかったが最後は認めてくれた。◎海外留学：日本で知識として学んできたことより、現地の人の物まねをしたほうが言葉が通じた。

まとめ：恥ずかしいことや厳しいことを乗り越えたことで印象に残り、また達成感があったときに効果が上がる。

<感想>

現在までの学習体験で一番心に残っている出来事を絵にするという、今までに経験したことのない方法での発表であったが、逆に印象に残った。

・A、B、Cグループのまとめ

- ① 部活、実習などで苦しい練習や指導者、実験などを乗り越えて、記録や発表などの成果を出したときの達成感
- ② 今まで出会ったことのない優しい態度や方法で講義や実習を受けたときのインパクト
- ③ 怖く、厳しい指導をされても成果が出たことに対する感謝
- ④ お酒を交えながら会話をすることで、人としての深い話や、怒られたときの切り替えなどができた

最後にレクチャーされた望ましい学習活動の中に、自分たちがあげたものがほとんど含まれており。今後の教育に生かせるヒントがつかめたと感じられた。

セッションⅡ (担当：梶原武弘)

<概要>

「印象に残る指導者は誰か」

- ・大学院時代の恩師

- ・特徴のある中学校の英語の先生
- ・話が上手く人を惹きつける予備校の塾長
- ・個人主義プレイヤーを入れても結果を出せる NBA（バスケットボール）の名監督

「指導者に必要なものは何か」

- ・人間性（厳しさと優しさ）
- ・知識（専門性）。
- ・向上心（熱意）
- ・謙虚さ

「どのような指導者になりたいか」

- ・人間性が高い
- ・知識（向上心）を持つ

この 2 つを持ち合わせる指導者が理想。ただ、他人（部下、学生）の意見も聞きながら、時と場合でバランスよく対応できる能力も必要。

<感想>

印象に残る指導者としては一般的に有名な指導者ではなく、身近で自分に大きな影響を与えてくれた指導者の名前が上がった。これは良い場合も悪い場合にしても、自分自身への影響が大きかったためと考えられる。

指導者に必要なものとしては、人間性、知識、向上心、謙虚さが上がったが、どのような指導者になりたいかという問いに対しての答えも、人間性と知識の 2 つにまとまったのが興味深かった。また指導対象が個人か団体かによって指導方法が変わる可能性があり、指導内容のバランスが大事であるという結論には達したが、いまひとつ明確な解答が得られないという点でも難しい問題だということが興味深かった。

セッションⅢ （担当：三浦裕仁）

<概要>

3 つの問題点が抽出された。

①学生側の問題

学習意欲や目的意識の低さに起因する問題

②教員および組織の問題

教員のやる気不足、シラバスや教育方針の不明瞭さ。

これは講座や診療科間の連絡不足が原因が指摘された。

③施設の老朽化や立地の問題

①と②の間には相互作用があり学生と教員の間に不信感が生じていることが指摘された。学生、教員の両者に対して過度の負荷がかかり鹿大の魅力が失われているのではないかと指摘がなされた。

<感想>

講座間の連結、鹿大の魅力がキーワードになると感じた。講座間の連携やコミュニケーションを増やすことは容易である。今回のような FDWS を開くことがその第一歩である。自分自身も今回参加したことで多くの先生方と知り合え、新しい視点で共通の問題意識に触れることができ有意義であった。鹿大の魅力の創出という問題は困難な問題であるが、学内でお互いの情報を交換するなどの解決法が

あるのではなかろうか。

セッションⅣ （担当：石畑清秀）

<概要>

C グループの最優先解決課題 『組織、教員の問題』

- ・講座間のコミュニケーション（定期的なカンファレンス）
- ・評価基準の標準化、シラバスの作成
- ・教員の意識向上→定期的な FD への参加等

A グループの最優先解決課題 『教員のやる気』

- ・学生と触れ合う
- ・良い（見本となる）先生のまねをする
- ・自己のブラッシュアップ

B グループの最優先解決課題 『臨床実習』

- ・診療科間の連携
- ・1 人の配当患者を実習
- ・交流の拡大…教員 - 教員、教員 - 学生
- ・教育に対する評価システムの構築

<感想>

- ・FD そのものが講座間のコミュニケーションの 1 つとなりうる
- ・評価基準の設定：研究のみを評価するのか教育を評価対象としていくかなど、今後考えていかなければならない

- ・大学は教育をして当たり前の場所
- ・3 グループに共通していたのは

講座間の交流が重要である

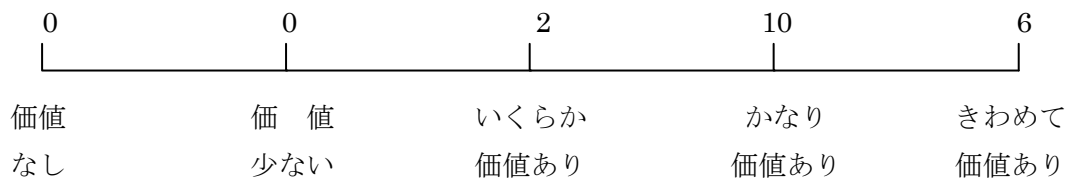
教育に対する評価システムの構築が急務である という認識

教員が思い悩んでいる内容は類似していると感じられた

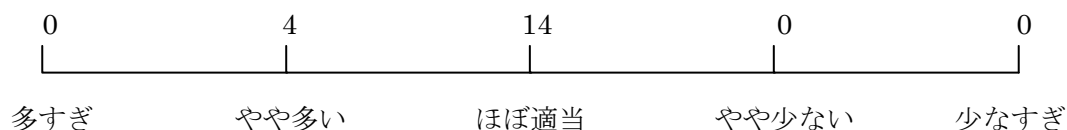
18) ポストアンケート結果

(1) 今回のワークショップを、全般的に評価してください。

内容の価値についてどう評価しますか？



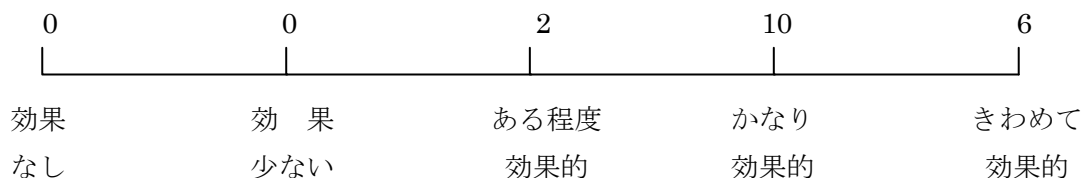
内容に対する時間量はいかがでしたか？



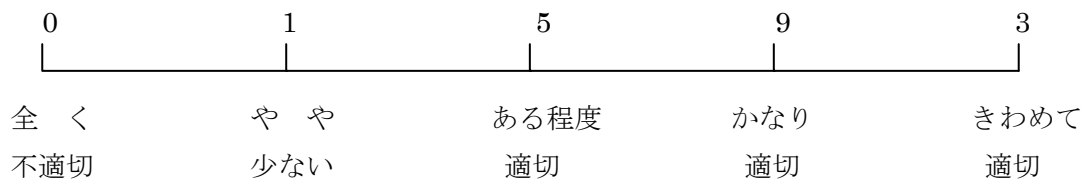
内容の難易をどう感じましたか？



このようなワークショップ形式の教育方法としての効果についてどう思いましたか？



このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか？



(2) 今回のワークショップ全体にわたり、良かったと思われる点

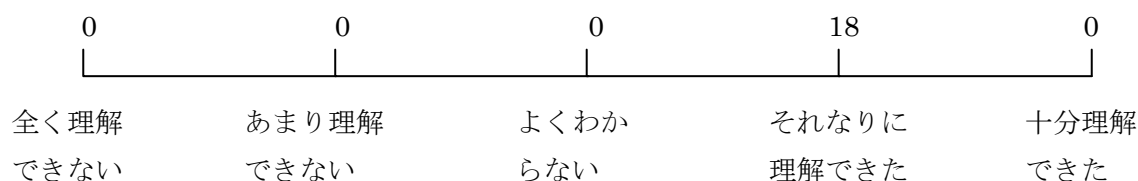
- ・通常では話す機会のない先生方と話し合えることが有意義であった (14)
- ・より効果的な教育方法論を学ぶことができた (5)
- ・自分の教育について見直す機会を得た (5)
- ・大学の現状を知ることができた (3)
- ・適切な時間配分であった (3)
- ・問題解決に対する難しさについて、現場の肉声を聞いたこと (2)

- ・グループでの話し合い。人数的にも丁度よかった
- ・各科まんべんなく参加されていたこと
- ・日頃考えていたことが話題として出せた
- ・現在の歯学部教育問題を改めて意識化、明確化できたこと
- ・自分と異なる意見を聞いたこと
- ・教員間での問題認識が似かよっていることが分かったこと
- ・何となくではなく、具体的な答えを出すように努力したこと
- ・問題点を共有できたこと
- ・ワールドカフェ等の手法を体験できたこと

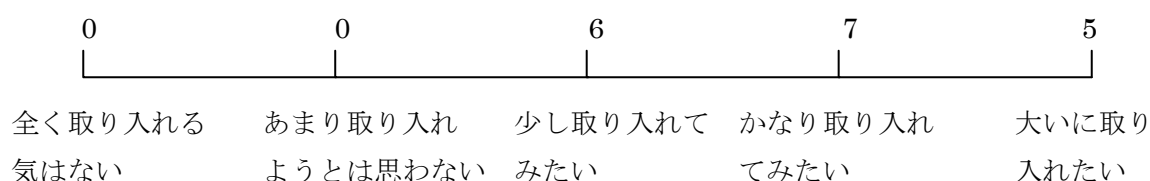
(3) 今回のワークショップ全体にわたり、芳しくなかったと思われる点 (改善すべき点)

- ・時間 (スケジュール) がタイトであった (休憩が欲しい) (6)
- ・行うなら、全ての講座のメンバーが参加すべきであった
- ・最終的な還元方法 (個人あるいは組織) が明確でなかった
- ・発表後の討論がもう少し盛り上がりと思う
- ・セッション I の意図が明確でない
- ・他班の意見に対してもっと積極的に考えを述べられたらよかった
- ・今後どうするのか (が明確でない)
- ・(当たり前であり、理解できるが) 効果的かつ簡便な解決策がないこと
- ・KJ法の限界を個人的に感じる
- ・連絡メールが前日に配信された点
- ・タスクフォースが意見を言いすぎているようにも思えた
- ・レクチャーがもう少しあればよいと思う
- ・もう少し説明時間が長くてよかったと思う
- ・事前に討論内容を理解していない点
- ・9階 (会場) の臭いが気になった。(会場が当初の予定と変更になった点)
- ・1回で終了せずに継続すべきではないか

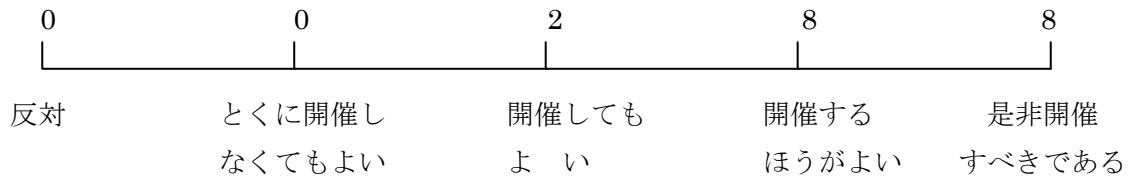
(4) レクチャーで示されたような教育学の理論が理解できましたか?



レクチャーで示されたような教育学の理論を自身の教育に取り入れようと思いますか?



(5) 今後もこういうワークショップを開催することに対して



(6) このワークショップでの経験を通して、今後実施したいと考えていることを箇条書きにしてください。

- ・他講座とのコミュニケーションを増加させる (6)
- ・学生とのコミュニケーションにかかる時間をもう少し多くとった方が良いかもしれないと感じている (4)
- ・今回参加した者の経験を参加していないものにどう反映させるか考えたい (3)
- ・学生の主体性を重視した方法を取り入れる (3)
- ・自身の教育を再検討してみたい (3)
- ・現在実施している教育方法を点検する (特に学生の視点から)
- ・シラバスを書き直す (?)
- ・教育上の改善点を注意深く探したい
- ・FD について学びたい
- ・「教育」ではなく学生の「学習」を促したい
- ・大学の使命 (研究・教育・臨床) を意識して学生と接したい
- ・若手の教育研修会参加への通達
- ・学生が catch できるように教えたい
- ・普段からあいさつしたり (あいさつを) 返したりしているが、さらに意識したい
- ・SPICES な教育を意識的に取り入れたい
- ・教員は常に無意識下でも教育しているということを肝に銘じる
- ・学生とのより身近な実習での関係
- ・学生の到達度を把握するため、評価を行う
- ・教育カリキュラムなどのシステム作り
- ・学生が習得するためにはどのような工夫が必要か具体的に考える
- ・講義の質の向上
- ・ワークショップで行ったことの、実際の講義への活用

8. 日本歯科医学教育学会主催「第4回医療コミュニケーション・ファシリテータ養成セミナー（中級編）」への教員派遣報告

報告者：吉田礼子（歯科総合診療部）

<セミナーの概要>

- 1) 実施日時：平成22年12月11日（土）－12月12日（日）（2日間）
- 2) 開催場所：邦和セミナープラザ（愛知県名古屋市）
- 3) 主 催：日本歯学医学教育学会（教育能力開発委員会）
- 4) 参加者：歯科医療者養成機関の医療コミュニケーション担当教員36名
（医療コミュニケーション・ファシリテータ養成セミナー（初級編）の修了者）
セミナースタッフ：17名

5) 到達目標：

一般目標G I O

歯科医療者の卒前教育・卒後研修における教育指導能力を向上させるために、対人コミュニケーションの基礎並びに医療コミュニケーションの教授・評価法（ファシリテーション）についての態度、技能、知識を修得する。

行動目標S B O s

- 1) 医療現場の対人コミュニケーションを説明する。
- 2) 医療に必要な対人コミュニケーション教育を実施する。
- 3) 面接技法における推理・推論の教授法を行う。
- 4) 面接技法におけるインフォームドコンセントの教授法を実施する
- 5) 面接技法における患者教育（指導）の教授法を説明する。
- 6) チーム医療に必要なコミュニケーション教育について説明する。
- 7) フィードバック困難事例に対応する。

6) 実施形態：ワークショップ形式

7) スケジュールと内容：

第1日：

- | | |
|-------|------------------------------------|
| 11:00 | 開講式 |
| 11:30 | レクチャー1：「臨床現場に求められる医療コミュニケーション教育」 |
| 13:00 | セッションⅠ：面接技法（推理・推論～察する、押し量る） |
| 15:30 | セッションⅡ：フィードバック1 トランスクリプトの作成に習熟するー |
| 17:10 | セッションⅢ：フィードバック2 ー気づきを促すためのフィードバックー |
| 19:30 | レクチャー2：「医療現場の会話とコミュニケーション」 |
| 21:00 | 情報交換会 |

第2日：

- | | |
|-------|--|
| 8:30 | レクチャー3：「安全管理とコミュニケーション」 |
| 9:10 | セッションⅣ：OSCEを超えるセッションのファシリテーションを考える
ーSPシミュレーション授業ー |
| 12:50 | セッションⅤ：対人コミュニケーションの教授法（演劇的活動を用いて） |
| 15:00 | セッションⅥ：総合討論 リアリティのあるSPシナリオと演技のために |
| 16:00 | 修了証授与式 |

本セミナーは、医療コミュニケーションの教育技法の普及・啓発やそれに携わる教員の教育能力の向上を図るために、日本歯科医学教育学会が、平成19年から3回にわたって開催した「医療コミュニケーション・ファシリテータ養成セミナー（初級編）」のアドバンスコースとして開催された。

共用試験での医療面接を超えて、実際の医療現場に求められるコミュニケーション能力を開発するために、臨床推論、トランスクリプトとその活用、SPシミュレーション授業と体系的に学ぶことができた。また、いわゆる対人コミュニケーションの基礎的理論を体験的に学ぶことができた。タイ

トなスケジュールであったが、意欲的な参加者ばかりで、有意義な2日間であった。

＜ワークショップの実際＞

セッションⅠ：面接技法（推理・推論～察する、推し量る）

医療面接における臨床推論をテーマにして、臨床推論の方法とその教授法についてグループ討議後、シミュレーション授業を行った。

セッションⅡ：フィードバック1 ―トランスクリプトの作成に習熟する―

医療面接のビデオを視聴しながら、各自でトランスクリプトを作成し、効果的なフィードバックを行うための分析法を体験した。

セッションⅢ：フィードバック2 ―気づきを促すためのフィードバック―困難事例

自己の医療面接に対して振り返りができない事例について、実際のビデオを視聴して、フィードバックの内容と方法についてグループで検討し、発表した。

セッションⅣ：OSCEを超えるセッションのファシリテーションを考える―SPシミュレーション授業―

初診医療面接、診察・検査後のインフォームドコンセントという連続した場面設定でSPシミュレーション授業を行う際のファシリテーションについて、実際に面接を行った後にトランスクリプトを作成し、グループ討議後、フィードバック場面のロールプレイを行い、発表した。

セッションⅤ：対人コミュニケーションの教授法（コミュニケーション教育と演劇の活用）

演劇をコミュニケーション教育に取り入れている難波博孝先生（広島大学大学院教育学研究科）のもと、実際の教授法を体験した。

セッションⅥ：総合討論 リアリティのあるSPシナリオと演技のために

各機関の医療コミュニケーション教育の実態、問題点、工夫などについて、活発な討議が行われた。

レクチャー1：「臨床現場に求められる医療コミュニケーション教育」

藤崎和彦先生 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター

レクチャー2：「医療現場の会話とコミュニケーション」

渡辺義和先生 南山大学総合政策学部

レクチャー3：「安全管理とコミュニケーション ―クレーマー、モンスターにしないために―」

木尾哲朗先生 九州歯科大学

9. 歯学部FD委員会委員による学外施設へのFD及び教育研修活動協力実績

田口則宏

平成22年5月29～30日 広島大学霞キャンパス

広島大学病院主催「第12回 中国・四国地区歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」

役割：タスクフォース

平成22年12月16～19日 富士教育研修所

日本歯科医学教育学会主催「第1回 歯科医学教育者のためのワークショップ」

役割：タスクフォース

10. 平成22年度鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科医師臨床研修指導歯科医講習会

実施報告書

別冊